

# 『拍案驚奇』の眉批について

—作者・テキスト・評者の関係をめぐって—

村 田 和 弘

## 0. はじめに

古典白話小説を具体的な読書行為の対象として見るとき、紙面の様式は重要な意味を持つ<sup>(1)</sup>。明末の代表的“創作”白話小説集『拍案驚奇』とその続編『二刻拍案驚奇』（以下二拍と併称）の紙面は、何よりも行側に付けられた圈点や欄上、行側に印された眉批・夾批によって特徴付けられている。当時の読者の読書行為が、これら圈点や評語と本文の相互関係で成り立つものならば、圈点の付けられ方や評語の意味内容、あるいはテキスト本文との関係は、物語の内容理解とも関わる重要な問題であろう<sup>(2)</sup>。本稿はこうした問題意識から、二拍の評語を取り上げたい。評語の書き手（評者）はテキストを最初に通読した第一読者であり、読者に語りかける第二の語り手であるが、二拍の特徴は、テキストの作者と評語の評者という別個の語り手が、実作者凌濛初の二つの分身であることにある。この自作自批という形の二重の声を聞きながらテキストを解釈し、評語の様相を検討すること、これが本稿の意図するところである。

## 1. 眉批の存在意義

テキストに施される圈点や眉批・夾批・回評・総評・序文等を評点（批点）と呼び<sup>(3)</sup>、これらを持つテキストを評点本（批点本）というが、二拍の信頼できる版本は<sup>(4)</sup>評点本として刊行されている。評点の責任者が作者凌濛初であることは、『拍案驚奇』の封面に「即空観評閱出像小説」と銘打つことから知られる<sup>(5)</sup>。評は評点行為、閱は校閲行為を指し、注釈者、校閲者が凌濛初であることを端的に表している。つまり評点も本文と同じく、署名入りの二拍テキストの構成要素なのである。あまりに自明なこの事が、却って今まで等閑視されてきたのではないか。

二拍には総計で2,174条の眉批・夾批が加えられている。内訳は、『拍案驚

奇』が1,195条(眉批988, 夾批207)で1巻平均29.9条, 1葉平均1.4条, 『二刻拍案驚奇』が979条(眉批790, 夾批189)で1巻平均25.8条, 1葉平均1.1条である。この数字は三言の眉批の総数1,668条と比較するとき、驚くべき高密度だと言える<sup>6)</sup>。

さらにあまり注意されていないことだが、眉批・夾批はテキストに圈点が付けられているときは、厳密に圈点と対応している。例として『拍案驚奇』第1巻(以下巻数を表すときは『拍案驚奇』をI, 『二刻拍案驚奇』をII, 巻数を数字で表す。この巻はI-1と略称)の最初の眉批は「能使英雄淚出。」(1a)<sup>7)</sup>というもので、対応する文は開巻冒頭の語り手のナレーションである。

試看往古來今一部十七史中, 多少英雄豪傑, 該富的不得富, 該貴的不得貴。能文的倚馬千言用不着時, 幾張紙蓋不完醬甌。能武的穿楊百步用不着時, 幾簞箭煮不熟飯鍋<sup>8)</sup>。

この文で圈点が付いているのは前半の「英雄豪傑」の文ではなく、後半の「能文」「能武」の方であり、この眉批の「英雄」が直接には後半に対して加えられたものであることを示している。そこから凌濛初の意図を汲み取ると、卓越した文武の才を抱く者も世に不遇ならば全く正当な扱いを受けないこと、そうした優れた人物を「英雄」と呼び、繰り返される「用不着時」で、その不遇の悲哀を訴えるのが主眼であることがわかる。もし眉批の「英雄」という語を前半の「英雄豪傑」にかければ、「英雄」の具体例として挙げられている袁虎と養由基<sup>9)</sup>の「能文・能武」という形象が凌濛初自身の自負心の投影であり、ここに評者=実作者としての凌濛初の生の声が書き記されていることが解らなくなってしまっただろう<sup>10)</sup>。

眉批に書かれる「英雄」が科挙に不遇な知識人を指す用例はI-40にも見える。主人公が家は裕福だが10回連続して科挙に不合格となり、妻に責められる場面、

況且妻子又未免圖他一官半職榮貴, 耳邊日常把些不入機的話來激駢, 一發不知怎地好, 竟自沒了主意。(15b)

後半の圈点部に対する眉批に「失路英雄, 異世同感。」とある。眉批の書き手はテキストの主人公に「同感」し、そのような方途を失った知識人を「英雄」と呼び、読者も「同感」することを願っているのである。また筋の展開では主人公が賄賂で進士に及第する叙述に「錢神有靈, 併才士亦須之, 彼才而貧者, 何處生活。」(20a)と眉批を加えるのは、もはやテキストへのコメントではなく、凌濛初の科挙経験から来る、偽らざる感想が吐露されていると言えるだろ

ら<sup>41)</sup>。

『拍案驚奇』の第1巻と第40巻に特殊な意味を帯びた同じ「英雄」という語彙が出てくることは、おそらく偶然ではないだろう。第2巻から第38巻の間に全くこの語彙が出ないことを考えれば、両巻は同じ主題により意図的に配置され、テキストのはじまりとおわりを形成していると考えられる。この編纂方法については後述する。

「英雄」という評語を読むことにより初めてテキストが浮かび上がる。読者における本文の解釈はこの眉批に因り決定されると言ってもよいだろう。また眉批の方により直接に凌濛初の声が託されている場合も見られる。

以上のように、二拍の眉批・夾批は数的にも質的にも見過ごすことのできないテキスト構成要素だと考えられる。

## 2. パラテキストとしての眉批・夾批

テキスト本文に対する評者の立場を考えると、紙面における眉批・夾批の空間的な位置関係は一つの示唆を与えてくれる。なぜならパラテキストと呼ばれる概念をこの評語に当てはめることが可能となるからだ。

パラテキストとは、テキスト本文を取り巻いて周縁を構成し、本文を延長し補足する準テキストを指す。パラテキストは読者との接点となり、「テキストとその読者、あるいは読者が属する社会、との間の仲介者の役割を果たす」。またパラテキストはその超テキスト性から「自己注釈」となる<sup>42)</sup>。

二拍の評点をパラテキストとして捉え直せば、この評語は評者凌濛初による、自分自身のテキストへの注釈という形を取った、明末の読者社会との共感関係の構築を意図したもう一層のテキストに他ならず、テキストの語り手(作者)とは語りの水準を異にする。

パラテキストの語り手は、テキストの語り手の語る行為そのものを対象とする第一読者である。例えばI-29で、主人公と結婚を誓い合った娘を親が別の家と婚約してしまうが、県令が主人公のために相手の家に離婚書を書かせてそれを主人公に見せる場面に「真好縣宰、然而此時不爲奇也。」(30b)という眉批がある。「此時」がテキストのこの場面を指すが、それ以前に既にテキストでは離婚書は話題に上っている。物語内人物である主人公にとっては初めて接する「奇」なるものであるが、読者にとってそれは初出の情報ではなく、「奇」ではない。この評語は読者から見たテキストの語り方を問題にしている。そしてその評者はテキストの読み方をわれわれ第二の読者に語りかける第二の語り

手でもある。二拍の特徴はテキストの語り手とパラテキストの語り手が同じ凌濛初に帰せられる（と明言した）こと、そして評語の語り手が個性化されて<sup>63</sup>、読者社会に向けて第二の語り手として凌濛初自身が評語を発信したことに求められよう。

以下、このパラテキストである眉批・夾批とテキストとの関係を見ていく<sup>64</sup>。

### 3. テキストに対する評語の相対的独立性

二拍の評語がテキストと同時進行で書かれたものではなく、後から別に書かれたものであることは、物語の前後関係に関する評語が頻出することから知られる。例えばⅠ-1は入話正話ともにテキストに占い師の言葉が出てくるが、評者はそこで結末での応驗を遙かに予示<sup>65</sup>したり、あるいは後で応驗を確認する評語を付けている<sup>66</sup>。

また典型的な男の背信の物語であるⅡ-11を見てみると、主人公満少卿は冒頭で「因他做事沒下稍，諱了名字不傳。」と不吉な紹介をされる。放浪の挙げ句に窮状に陥り見ず知らずの老人に助けられる場面で、老人の「秀才一表非俗，目下偶困，決不是落後之人。」と主人公を高く買うせりふに対しては「此老可謂具眼，詎知反爲所誤。」（7 a 眉批）と、そのせりふを肯定しながら、逆にこのせりふがもとで身を誤ることを言う。この予示により読者のディスクール<sup>67</sup>理解は揺さぶられ、老人の不幸な結末を予想しながら本文を読み進めるよう促される。感謝する満少卿の「異時尙有寸進，不敢忘報。」というせりふに対しては「此時偏會說厚話。」（8 b 夾批）と、せりふの不確実さを暗示する。老人の娘、文姫と私通した満少卿は「若有負心之事，教滿某不得好死。」と老人に懇願し、老人も「抑且沒奈何了，只得胡亂揀個日子，擺些酒席配合了二人。」と二人を結婚させる。この場面で、満少卿のせりふには「應驗。」（13 b 夾批）、老人のせりふ（前半部）には「所以起後日之輕薄也。」（13 b 眉批）と、男の悲惨な死が予め確定され、後の背信の契機がここの倉卒な結婚にあることが指摘される。満少卿が登第した時も、喜ぶ父娘に対しそれぞれ「未必。」（16 a, b 夾批）と評している。物語の結末は、登第した満少卿は文姫を見捨て大官の娘と結婚し、文姫の亡霊に取り憑かれ無惨な死を遂げる。これらの評語は、物語構成を科挙合格を転換点として前半の放浪、出会いと後半の背信、死亡の2つに分け、前半の男の言動を全て後半との比較から見る視点で貫かれた分析的な言説であり、予示により解釈の糸口を提供する読者への解説となっている。

このように評語の語り手は、テキストの全てを鳥瞰できる視点から予示など

の評語を加え、物語の前後の照応関係を指摘しており、本文の語り手とは位相を異にしている。凌濛初は評者の立場を使ってテキストの構成を明らかにし、読者に提示するのである<sup>88</sup>。

評者はテキストの語り手とは同一化されない、個性化された本文の読み手であり、評語の語り手である。例えばⅡ-39で、神盗が僧に悪戯を計画するせりふ「若他失去了新帽，明日不來遊山了，有何趣味。你不要管，看我明日消遣他。」に対して、「文字做得深一步，纔有趣。」(23b眉批)と、本文の「趣味」を借りながら叙述への不満を述べているが、両者とも凌濛初が後ろにいる語り手でありながらこうした眉批が書かれるところに、パラテキストの語り手の個性化が表れている。評語がテキストと一致し、実作者の声が響くことがあるのは、評者が物語の語り手から免れており、より肉声を書き易いためであろう。

#### 4. テキスト外部との関係を示す評語

前項はテキスト本文の内部関係を指摘する評語を見たが、他のテキストとの関係を明かす、創作ノートのものもある。Ⅱ-6で、娘の亡霊が両親に宛てて書いた手紙文に対して眉批は「此原傳筆也。幽明相通，一訴情事，何至虛文可厭。乃爾老學究伎倆，然改之無端，姑仍其舊。」(19b)と評する。この「原傳」とは素材である『剪灯新話』巻3「翠翠伝」を指し、素材の文章に対して抱いた不満(「虚文可厭」)を明かし、改作しなかった判断を説明している<sup>89</sup>。またⅡ-22では、ごろつきの唱う歌に対して「此原傳中詩也。多是達人口氣，不似癡敗人語。」(13b眉批)と、この詩が出来の良い詩であるので「原傳」からそのまま引用したことを説明している。

どちらも作者の創作にまつわる体験談であるが、ここでは作者の創作プロセスそのものが評語の対象となっていると考えられよう。評者の持つ全知の視点は、作者しか知らないはずの裏事情まで見透かしており、本文と素材との関係について批評するのである。やはりこれも自己注釈という語りの位相によって可能となる視座であろう<sup>90</sup>。

#### 5. 評語の語り手と本文との関係

テキスト本文と位相を異にし、個性化されたパラテキストの語り手には、テキストへの皮肉で嘲笑的な語り口が許容される。それは失敗者や性愛を笑いの種にすることによく表れている。他にも「安得如許血。」「血尙有遺耶。」(Ⅰ-37, 9b, 10a眉批)などはどちらも殺生の報いで冥司で裁かれる主人公が、動

物達に血を吸われる場面に付けられ、読者にグロテスクな笑いを誘う。また風刺的な笑いも頻見され、官吏の無能、汚濁や金銭への執着が特に風刺の対象となっている。

ところが皮肉とは逆に、評者がテキストの言説を全く肯定する場合がある。その巻の主題に関わるときがそうである。次の例はⅠ-1の本文冒頭のナレーションで、人間の運命を命定論的に述べる部分である。

俗語有兩句道得好，命若窮，掘着黃金化做銅，命若富，捨着白紙變成布。  
總來只聽掌命司顛之倒之。

この議論（特に前半の慣用語）に対して「徹語。」（1b眉批，見極めた語。）と評している。この語り手に対し仮想の聞き手が反問する。

說話的，依你說來，不須能文善武，懶惰的也只消天掉下前程，不須經商立業，敗壞的也只消天掙與家緣。却不把人間向上的心都冷了。

この反問は人間の運命を既に決定されているものとする命定論に対し、人間の努力は無意味なのか、と問いかける。その中に先に凌濛初自身の投影ととらえた「能文能武」と同じ「能文善武」という表現が有ることに注意すれば、ここは自身の不遇への諦め切れないもう一人の凌濛初が出ていることに気付く。語り手自身の矛盾という事態に対して、眉批は「一問有波瀾，沒破綻。」（2a眉批）と反問が的を射ているのを認めながらも、本文の命定論の言説に破綻はないと肯定する。

このような命定論的観念はⅠ-40にも見える。Ⅰ-1とⅠ-40は呼応してテキストのまとまりを形成すると先述したが、Ⅰ-40巻末で語り手は次のように言う。

奉勸世人看取數皆前定如此，不必多生妄想。那有才不遇時之人，也只索引命自安，不必鬱抑不快樂了。（22b）

これはⅠ-1で反問したもう一人の自分への遙かな回答のように見える。そしてここに「本旨。」（主題。）という眉批が加えられているのは象徴的である<sup>44</sup>。

これらの眉批は、この巻（あるいはこの書物）の主題を追認し、語り手たる作者の言説を完全に肯定する立場を取るが<sup>45</sup>、一方でテキストのディスクールに対して、パラテキストの語り手が何らかの不可解さや不自然さを表明することがある。このとき評語の語り手は、テキストの読者として立ち現れていると言える。そしてその疑問に対して独自の解釈を試みる場合がある。いわば批評家として作者自身が作品解釈を行っていることになる。例としてまずⅡ-30を見てみる。物語は、骨を埋葬してもらった200年前の女の亡魂が現れ、その男と

結ばれて子をなし、その子が立派になると二度と現れなくなる、という報恩的幽婚譚である。物語の中に、子をあやす女を突然男の母親が訪ね、女が楼上の窓から逃げるというエピソードがある。そのため女の怪奇性が取り沙汰され、子を他郷の川に流すという貴種流離譚へ移行するポイントとなる場面なのだが、ここで「既與人無異、如何見此鬼態。」(7 a 眉批)と幽鬼性を露呈する一貫しない人物像に疑問を抱いている。ここでは物語の類型論的分析ではなく、人物像の前後の矛盾が問題とされている。また同じ場面で、女が子を自分の故郷の湘潭(湖南省湘潭市)に流すと言うが、ここに「只欲寄養、何必湘潭。如此等處、皆不可解。豈所謂夙縁宜然耶。」(7 b 眉批)と、場所の合理的説明がないことを訝り、「夙縁」での解釈を試みている。人知を超えた縁の原理で物語を解釈することは、「所以不安閑、亦似自生多事、然或縁之所在、固宜爾爾。」(17 a 眉批)にも見える。また子が都合よく男の故郷へ任官することに対する「數也。」(18 b 夾批)は、やはり宿命的な数の原理で解釈している。

こうしたプロットは既に素材に備わっており、これらのコメントは潤色の際の凌濛初の解釈を示すものであることがわかる。最後の任官の件は素材になく、凌濛初の創作である。つまり自分の解釈に従ってエピソードを書き加え、そこに評を付けたのである。

II-30に表れている疑問は、テキストの種々の設定への疑問であり、その疑問に自らの解釈を示し、その解釈に基づいて創作的リライトを行ったと言える。解釈を示す例を以下に若干挙げておく。

- 1 此時何不再一裝局哄之。蓋所得已厭、恐再試而或露耳。(II-8, 19 b 眉批)
- 2 此却無解。或因其自恃有膽而戲之、或亦迫其下山白事乎。(II-13, 9 a 眉批)
- 3 何如姑與成獄、以俟矜恤、今執意乃爾、則王生不能活矣。(II-31, 14 b 眉批)
- 4 業重者如何有此縁、當爲年命未盡故。(I-37, 6 b 眉批)

例1は構成の解釈。例2は主人公が死体に追われるというプロットの不可解さを指摘し、その人物像からの解釈と展開の促進と見る解釈の2種類の解釈を読者に提示する。例3は主人公の自殺が必然であることを、その意志の在り方から説明する。例4は罪深い主人公の好い縁を、さらに「命」で解釈する。

縁・数の他に物語展開を解釈する人間を超越した原理として夙冤(「夙冤爲之也。I-36, 16 b 眉批)鬼神(「鬼神使之也。」I-35, 15 b 眉批)天(「亦天意也。」I-27, 10 a 眉批・I-38, 13 a 眉批)などが繰り返し使用されている。これらの評語は物語の合理的解釈を諦めている点で作者の都合のよい言い訳に見えるが、

「不由不動，可憐之甚。」(I-2, 9 b 夾批)「不得不鄭重耳。」(I-27, 20 b 眉批)などの語彙と同じく、あくまで展開の必然性を説明する意識の極端な表れではないだろうか。

設定への疑問もさまざまな形で発せられる。これもまず例を列挙する。

5 問得蹊蹺。(I-8, 17 a 眉批)

6 能幻形見僕而不見父，亦所不解。(II-6, 21 b 眉批)

7 此釵何忍賣之。酸甚，忍甚。(I-23, 20 b 眉批)

8 既有偌大家私，當時何必分房他往。(I-33, 10 b 眉批)

例5は盗賊が主人公の家族を唐突に問うおかしさを言う。例6は亡魂の出現の仕方不可解さを言う。例7は死亡した婚約者の形見を売り払う主人公の筋と合わない不人情さを言う。例9は財産家であるというディスクールと破産を免れるための分家、逃避という展開の不一致を言う。これらは物語構成の為の都合のよすぎる場面設定や、筋の展開と合わない人物設定の粗さ、展開の理由の付かないいい加減さなどを非難するものである。

例4で縁をさらに「命」で説明していたが、人物が事件に参加する因縁にテキストが何も触れないとき、この読み手は必ずそこに疑問を感じ、評語に残している。例を挙げると、

9 何縁得一遇乎。(II-37, 20 b 眉批)

10 女子何人。(I-36, 2 a 眉批)

11 固是天意，張生何辜受此非常驚恐。(I-36, 4 a 眉批)

12 必有宿負，不然何慘至此。(II-7, 10 a 眉批)

例9は主人公が女海神と出会う縁に対して、例10は突然現れた女に対して、例11は主人公が盗賊と間違えられて事件に巻き込まれることに対して、例12は善政の県令に干魃が襲うことに対して、それぞれ疑問を提出する。福を得るにせよ被害を受けるにせよ、人物の事件の関与について理由の説明がなければならぬとする物語観が窺える。とくに後2者の例は「天意」「宿負」で説明してもなお残る疑問を抑えきれないでいる

## 6. 行為としてのディスクールへの関心

予示やテキストへの疑問、解釈、皮肉などの評語は、いずれもテキスト本文のディスクール(叙述面)に対する別の意味付け作用を共通の性格としているが、ディスクール自体は文字通りに受け取られている。ここでは一歩進んで、ディスクールの行為性に評者が関心を向ける点を取り上げたい。

行為性とは述べることによって読者に真と思わせる小説ディスクールの策略であるが<sup>例</sup>、二拍で顕著な例は、男装する女性の言動、兄妹と偽る夫婦、身分の騙り、騙しの言動（嘘）などの趣向に真実とディスクールの乖離が見られる。この場合の真実とは、評者により見出される事柄であり、事前にテキストで明らかなることもあれば、結末から遡及して種明かしの評されることも多い。あるいは嘘のつもりでせりふが本当であること、本当のつもりで言動がそうでないことなど、ディスクールの不適切性<sup>例</sup>を述べるコメントが見られる。

例としてⅡ-3を取り上げる。この巻は「涙を流す」と述べる行為が重要な役割を果たすと考えられる。

この物語は、翰林編修の主人公が偶然手に入れた小箱の蓋を証拠に他人になりすましてその婚約者と結婚し、勅使の来訪で真の身分が露見し団円するという婚姻喜劇である。主人公が甥として夫人に会う場面で、夫人は「孺人含着眼淚、看那翰林」と描写される。この涙の叙述は、夫人が甥を本物だと思ふことを読者に伝える。一方でテキストは彼を「那翰林」と呼び、偽物であることを読者に明示する。作中人物の流す涙と、語り手の語る真実が異なっている。評者はそこを評する。「涕之無從。」(11b眉批、涙の該当すべきものがない。)という評語は、この場面での涙の記述の不適切性を指摘するものである。主人公も「翰林假意掩淚」と涙を流すが、ここでは嘘の涙だと明言している。そこに「又涕之無從。」(11b眉批)と同じ評語を加えるのは、「掩淚」というディスクールがやはり不適切であることを確認するものである。

この巻の素材は明、葉憲祖の『四艷記』秋「丹桂鈿合」雑劇であるが<sup>例</sup>、卜書きに「生入見介」「老旦各掩淚介」と所作が指定してある。二拍は役者の身体性をテキスト化し、さらに評語でその不適切性を暴くという二重のディスクール化を行ったことになる。

Ⅱ-3にはもう1カ所涙が出てくる。物語の最後に夫人が本当の甥の家の没落を主人公から聞かされる場面、「孺人道(中略)眞個是物在人亡了、不覺掉下淚來。」で、「此淚方有着落。」(26b眉批、この涙は初めて落ち着き先がある。)と評する。ここの涙は素材になく、凌濛初の付加である。その涙に対して、この物語の中で初めて適切な涙であることを指摘し、不適切な涙で幕を開けた身代わり婚姻劇に幕を下ろす働きを持たせたのだと言えよう。涙についてのディスクールがこの物語を支えていたのである。

その間の言動はみな本当であるかどうかの評語の対象となっている。例を挙げると、

1 誰知鈿盒文書却在，人却不是。(20 b 眉批)

2 好想頭，好臉皮。(10 a 眉批)

3 替死鬼。(10 a 夾批)

4 顏之厚矣。(11 a 眉批)

5 說得響的。(24 a 眉批)

例1は甥が鈿盒を持っているかわからないが人はもとのまままだ、という夫人のせりふに対して。ディスクールに反し真実はその逆であることを「誰知」という反語で示している。例2, 3, 4はそれぞれ主人公の夫人を叔母だと言うせりふ、自分がその甥だと宣言するせりふ、初対面で夫人を母と呼ぶせりふに対して。これらは発話行為の不適切さを面白がっている。5は娘の「五花官誥夫人」の分ではないと言うせりふに、それは簡単だと答える主人公のせりふに対して。主人公のディスクールの中でこのせりふは真実であることを示している。例2, 4のせりふは筋の展開に必要なため「丹桂鈿合」雑劇に既に備わっているが、他は同じ形では見えておらず、みな凌濛初の潤色である。そして評者としても物語の内容を単に鑑賞するだけの読者ではなく、読者を巻き込むディスクールの行為性にまで関心を向けていたことがわかるであろう。

…

## 7. おわりに

二拍の評語をテキストの付属物ではなく、テキスト本文を包み込むもう一層のテキストすなわちパラテキストと捉え直し、作者、テキストの語り手、評者の、あるいはテキストと評語の関係について検討を行ってきた。その結果、凌濛初はパラテキストである評語に予示、疑問、解釈、不適切さの指摘などの働きを持たせていることが判明したのである。そしてそのことによって読者に理想的な二拍読解法を提示し、そうした読解を懲悪するのである。明末の白話小説の読書界はこうした読みが受け入れられるほど成熟していたと言えるのではないだろうか。

無論相づち程度の評語も存在する。だが評者の立場の特殊性を反映する評語にこそ二拍の特徴が出ているだろう。本文のディスクールを評語が裏切るという行為は、凌濛初の評者への拘りを示している。テキストは素材のリライトという性格がどうしても残るが、評語は全くのオリジナルであること、何よりも評閱者として名号を明記しており、二拍が評者の小説であることはもっと重視されてよい事実であろう。

本稿では他の白話短篇小説における評点行為との関係や評語の書かれる文化

背景などについては触れることが出来なかった。これらは今後の課題としたい。

- (1) ロジェ・シャルチエ編著『書物から読者へ』みすず書房, 1992年などを参照。
- (2) 清水賢一郎「テキストの眉—清末小説の眉批とその批評性をめぐって—」『饕餮』第5号, 1997年を参照。
- (3) 張洪『中国小説理論史』安徽文芸出版社, 1992年などに拠る。
- (4) テキストは以下の影印本を使用。日光輪王寺慈眼堂所藏崇禎元年序『拍案驚奇』尚友堂原刊40巻足本(ゆまに書房, 1986年), 内閣文庫所藏崇禎五年序『二刻拍案驚奇』尚友堂原刊後修本(ゆまに書房, 1985年)。また広島大学所蔵『初刻拍案驚奇』39巻本, 内閣文庫本の上海古籍出版社, 1985年影印本を適宜参照した。
- (5) 即空観主人は凌濛初の号。内閣文庫本は封面が失われており確認できないが, 同様と考える。広島大所蔵本は『二刻拍案驚奇』の後に成立したテキストだが, 封面に「即空観手定」と銘打つ。
- (6) 中国話本大系本『拍案驚奇』(江蘇古籍出版社, 1990年排印本) 前言にも数字が挙げられているが, 広島大所蔵39巻本を底本としており, 完全ではない。三言はゆまに書房影印本に拠る。不明字が多く, 概算になるが比較には十分であろう。
- (7) 1 aは第1葉表を, bは葉裏を指す。
- (8) 圏点は○と、の2種類が使われている。ここでは実線が○, 点線が、の圏点を表す。両者の使い分けについては未だ確証を得ていないので存疑とするが, 、が文彩の優れていることを, ○が関目を表すように見える。
- (9) 袁虎は『世説新語・文学』に, 養由基は『戦国策・西周策』に故事が見える。
- (10) 例えば李田意輯校『拍案驚奇』友聯出版社排印本1986年4版は, こうした眉批と圏点の不正確な対応を犯している。
- (11) 凌濛初は確認できるだけでも4回郷試に副榜で落第し, 生涯挙人になれなかった。葉徳均「凌濛初事跡繫年」『戯曲小説叢考』中華書局, 1979年などを参照。また『二刻拍案驚奇』小引には, 天啓七年に郷試に不合格となり, 胸中の鬱憤を晴らすために『拍案驚奇』の筆を執ったとある。
- (12) ジェラルド・ジュネット『フィギュールIII』花輪光監修, 書肆風の薔薇, 1987年を参照。引用はその208頁。
- (13) David L. Rolston, *Traditional Chinese Fiction And Fiction Commentary*, Stanford University Press, 1997を参照。
- (14) 日下翠氏に「即空観評閱『拍案驚奇』」九州大学教養部『文学論輯』第39号1994年(後に『中国戯曲小説の研究』研文出版, 1995年)などがあり, 参考とさせていただいた。
- (15) パラテキストでの注釈なので「予告」ではなく, 予示という語を使っておく。ジェラルド・ジュネット『物語のディスクール』水声社, 1991年を参照。
- (16) 二拍では予言と応驗の呼応を常用する。例えばII-5は, 迷子の父親が「今是吾土三郎, 必然會歸來。」と言い, 末尾で「我説你們不要忙, 我十三郎必能自歸。」と言う

が、それぞれ「知子莫若父。」「應口。」と予告と確認の評語を付けている。こうした照応関係が物語の枠を形作るとされたのだろう。

- (17) 物語内容に対立する物語の表現面を指す。ジェラルド・プリンス『物語論辞典』松柏社、1997年増補版を参照。
- (18) 評者としての構成への関心の高さは注目される。II—5「節外生枝。」(14b眉批)「移花接木，暗渡陳倉。」(20a眉批)「接縫甚妙。」(I—26, 19a眉批)「真是合該有事。若一番即遇，無此變態矣。」(II—35, 5a眉批)などの評語は筋の転接や起伏の必要性を指摘する。
- (19) この手紙には馮夢竜も違和感を持ち、『情史』に編入する際に主人公夫婦の死後以降を削除して「似涉小説家套數，今刪之。」と評している。一方は白話化を断念，一方は原文の採録を拒否，と方向は逆だが，ともに明末の同じ感受性の中にいたことがわかる。
- (20) 取材源を明かしたり（「此元僧栢子庭之詩也。見輟耕錄。」I—10, 8b眉批など），モチーフの類型を指摘したり（「此牛肉，亦淳于之剩酒，盧生之黃梁。」I—37, 13a眉批など）する評語が多く，あるいは伝奇小説や筆記小説の作法を学んだのであろうが，評語での指摘はやはり作者の創作メモに近い。
- (21) この眉批は39巻本に見える。I—40は科挙の命定が主題だが，II—1冒頭のナレーションも科挙及第は答案の出来と関係ないとする内容で，『二刻拍案驚奇』が『拍案驚奇』を承ける形となっている。命定論を肯定する評語は他にもI—20「若是命中該絕。縱使姬妾盈前，也無干。」というせりふに対する「達甚。」(12b眉批)などがある。
- (22) 主題追認型の評語は，他に妻妾を置くことを論じたナレーションへの「正論。」(II—32, 6a眉批)などがある。このナレーションは「看官聽說」で始まる作者介入文であり，語り手が前面に出る部分である。
- (23) 万曆25年序『耳談』巻3「王玉英」。その改訂増補版，万曆31年序『耳談類増』巻23にも見えるが，文字が若干異なる。
- (24) 榊敦子『行為としての小説』新曜社，1996年を参照。
- (25) J. L. オースティン『言語と行為』大修館書店，1994年を参照。
- (26) 『古本戯曲叢刊第二集』北京図書館所蔵明刻影印本に拠る。

本稿は筑波大学平成8・9年度学内プロジェクト研究に基づく成果の一部である。

(筑波大学)